

# 第1回 「写真で見る富里の歴史」

2010・5・23

～ 大正～昭和期 富里の記憶 ～

林 田 利 之

## 1. 写真の歴史

### ●カメラのルーツ

写真が発明される19世紀以前にも光を平面に投影するという試みは行われていました。16世紀の画家達は立体の風景を投影するために、カメラ・オブスキュラ（「暗い部屋」の意味）（図1・2）やカメラ・ルシダと呼ばれる装置を利用して、その箱の中に投影された像をトレースすることで実景に似た絵画を描いていました。

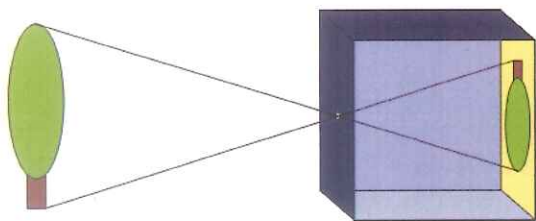


図1 カメラ・オブスキュラの原理



図2 カメラ・オブスキュラ

この初期のカメラといえるカメラ・オブスキュラは、像を単に壁にある開口部を通して暗くした部屋の反対側の壁に像を投影するだけのものであり、化学的にその像を固定する技術はありませんでした。

18世紀（1724年：享保9年）に入ると、ヨハン・ハインリッヒ・シュルツによって「銀とチヨークの混合物に光を当てると黒くなる」という現象が初めて発見され、その後も、塩化銀やハロゲン化銀と呼ばれる銀の化合物の一部は感光すると色が変わることが知られましたが、この現象とカメラ・オブスキュラを組み合わせる発想は出てきませんでした。

やがて19世紀に入り、カメラ・オブスキュラの映像と感光剤を組み合わせ、映像を化学的に定着させるという写真技術の発明が複数されました。この時期、産業革命によって大勢誕生した中産階級では肖像画の需要が一気に高まりを見せた時期でもあり、石版画や新聞図版、複製画などにもカメラ・オブスキュラが活用されていました。

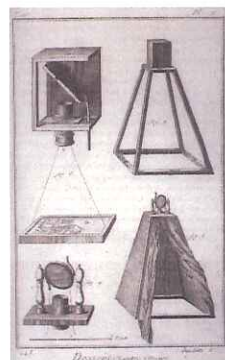


図2 1772年の百科事典に掲載されたカメラ・オブスキュラ

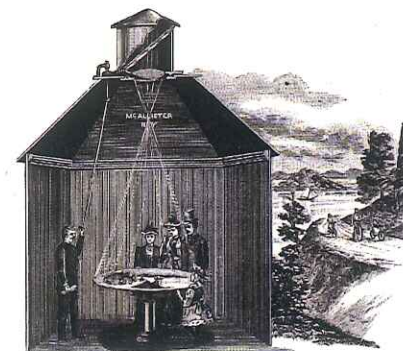


図3 大型のカメラ・オブスキュラ

### ●写真の普及へ

世界で最初の写真は1827年（文政10年）にフランス人発明家ジョセフ・ニセフォール・エニプス（図4）によって作られました。彼は、アスファルトが光に当てると硬くなる性質を利用し、カメラ・オブスキュラに装填して自宅からの眺め（図5）を写しました。しかし、明るい日光の下でも露光には8時間を要していました。

その後エニプスは1724年にドイツ人、ヨハン・ハインリッヒ・シュルツ（図6）の発明に基づいた銀化合物を感光剤として使用した実験を開始し、露光時間の短縮を目指しました。



図3 エニプス



図5 ニセプスによる世界最初期の写真1827年



図6 シュルツ